

【 データ・サイエンティストとしての板倉聖宣先生 】

◆板倉聖宣著『仮説実験授業の研究論と組織論』
（仮説社・1988年）に収録されている下記論文は
「データサイエンス」の先駆けです。

◆「集会における本の売り上げ高に関するイタクラの
法則」—長い長い「らくがき」—（初出・『仮説実験
授業研究』第3巻（仮説社・1975年1月）

◇以下、本文より引用。

◇……この文章，はじめに思ったよりもずっと長くな
ってしまった。この文章を書いている途中で，この一
つの法則がいかにして気づかれ，確認されるようにな
ったかという話をする事自体に興味をもつようになって
きたからである。

◇もしかすると、この話は「一般に法則というものはいかにして発見されるか」ということを考える手掛かりとなるかもしれないなどと考えるようになったのである。そこでいっそのこと、文章がもう少し長くなるのを許していただいて、話をつづけることにする。

◇私がこの法則を発見することができたのは、けっして、はじめにデータを集めてそれを解析するというやり方にし上がったためではない。

◇本の売り上げ高と会費収入との間に、ある関係があるらしいなどということはふつう考えつかないものだ。

◇しかし、何かの機縁でそういう仮説が生まれてはじめて、この二つの量の関係に注意が向くので、それですぐに「もっともらしい仮説」になり、新しい実験で吟味されることになるのである。

◇ こういう法則を発見することのむずかしさとたのしさとは、 一見まったく関係のなさそうなくつかの量の間「ある種の関係があるらしい」と気づくことであって、 それに気づけばそのあとのデータ集積とその解析は、 だれだって簡単にできることなのである。……
(引用以上)

◆ そのつもりで思い出してみると、 板倉先生の論文「ひのえうま迷信と科学教育」(『私の新発見と再発見』(仮説社)、 大著『模倣の時代』における「脚気による死亡者数」の変遷と原因究明との因果関係、「予想分布の七段階予想法」(『たのしい授業』1991年1月号, No98) などが思い出されます。他にもたくさんあるでしょう。

◆ 以上から、 板倉聖宣先生は「戦後教育におけるデータ・サイエンティストの先駆け」であると言えます。